

生き生き

NO. 75 平成21年6月号

岡崎市現職研修生活科広報部発行

2つのキーワードを基に特色を生かした活動を

生活科部長 増澤 徹

「太鼓の皮を張るときは、皮をのばすために上に乗ります。私たちは鉦がうまくうてませんでしたが、三浦さんは簡単そうにやっていました。」

「お茶を入れるコツを真野茶舗さんに教えてもらいました。お湯を少しさましてからきゅうすに入れ、1分待ちます。それを同じ色になるように分けるとおいしくお茶が飲めます。」



町探検でお店の人々と何度もかかわり、見たり聞いたり体験したりする中で気付いたことをワークショップ形式で発表する子供たち。実演したり、絵や写真を見せたり、ペープサートで伝えたりと表現方法も多様である。活動を終えた子供たちは、好きになった場所や親しくなった人が増えるとともに、地域の人や様々な場所とかかわって生活することの楽しさにも気付くことができた。

生活科の学習は、具体的な活動や体験を通して行うことが前提である。この具体的な活動や体験について、指導要領には次のように例示されている。

- 見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなど直接働きかける学習活動
- 活動の楽しさや気付いたことなどを、言葉、絵、動作、劇化などの方法で表現する学習活動

生活科は子供たちの思いや願いを生かし、具体的な活動や体験を織り込みながら、子供たちが没頭できるような学習を展開することが重要である。

さて、今回の指導要領改訂では気付きの質を高めることが求められている。そのためには、対象と繰り返しかかわることが必須条件である。しかし、繰り返すと言っても、ただ漫然と繰り返してはだめである。そのためには教師の手立ては欠かせない。前述した町探検で言えば、1回目の探検を振り返らせたり、教師が称賛や問い返しをしたり、解決可能なハードルを設定したりして、子供たちにもっと詳しく探検したいという思いを持たせることが必要である。

「具体的な活動や体験を通す」「対象と繰り返しかかわる」この2つのキーワードを基に、各校の特色を生かした学習が展開されることを期待している。